

身体部位に対する人物等割当のイメージ調査 ～人物割り当てとパーソナリティ特性語割り当て～

Image Research into Allocation for Person to Body Parts ～Person allocation and personality characteristic word allocation～

又 吉 光 邦
Mitsukuni Matayoshi

キーワード：パーソナリティ，パーソナリティ特性語，指，身体，人物，エゴグラム

1. 動機
2. 目的
3. 第1次研究
 3. 1 指以外の両手足，頭，心臓（心）の部位（以下，身体部位と呼ぶ）への人物イメージ
 3. 2 結果
 3. 3 左足（自己と他者）
 3. 4 まとめ
4. 第2次研究
 4. 1 パーソナリティ特性語を用いた身体部位の好意度と非好意度
 4. 1. 1 「頭」に「自分」と回答の「好意」の選択頻度数
 4. 1. 2 「頭」について－好意－
 4. 1. 3 「手」について－好意－
 4. 1. 4 「足」について－好意－
 4. 1. 5 「心」について－好意－
 4. 2. 1 「頭」に「自分」と回答の「非好意」の選択頻度数
 4. 2. 2 「頭」について－非好意－
 4. 2. 3 「手」について－非好意－
 4. 2. 4 「足」について－非好意－
 4. 2. 5 「心」について－非好意－
5. まとめと今後の研究課題

1. はじめに

1. 動機

我々は，身体を機能等によって区別している。例えば，物理的作業の担い手としての「手」「足」，推論や判断などの作業を司る「頭」，感情の「心」などである。

例えば，「指」には，表1のように「俗称」が与えられているが，それには，長い歴史や

文化的な背景，あるいは人間のもつイメージが投影されているのではないだろうか。特に幼児語における各指の名称は，大きさや太さ，長さなどに由来するイメージが「俗称」となって表現されていると思われる。

ここで，日本における古くからの指の俗称を調べ，興味深い名称とその意味を見てみると，次のようであった。

表 1. 日本語（和語）における指の名称

		第一指	第二指	第三指	第四指	第五指
和語	標準	親指	人差し指	中指	薬指	小指
	幼児語	お父さん指	お母さん指	お兄さん指	お姉さん指	赤ちゃん指

- ・ 拇指（おほおよび）→ 最も力がかかる指
- ・ 食指（ひとさしのおよび）→ 食事だけに用いる
- ・ 中指（なかのおよび）→ 物を取る
- ・ 無名指（ななしのおよび）→ 薬師が薬を調合
- ・ 季指（こおよび）→ 季は、末 or 小の意味

（和漢三才図会；正徳 2 年（1712 年））

- ・ 親指（おほゆび）→ 一家の主人
- ・ 人差指（ひとさしのゆび）→ 和名：食指
- ・ 中指（なかゆび）→ たけたかゆび、長指
- ・ 薬指（くすりゆび）→ べにさしゆび、
くすしゆび
- ・ 子指（こゆび）→ 親指に対して

（日本大辞典；言泉，昭和 2 年）

著者も幼少のころ「子指」と習ったのを小学校で「小指」に直された記憶がある。また、現在ではあまり用いなくなった「拇印」も元は、「拇指（おほおよび）」から来ていることがわかる。

また、又吉（2002）の「身体部位への人物割り当てについて～相関分析および因子分析を中心に～」よれば、100 年以上前の尋常小学校の「小学国文読本巻五」にも「指」の名称を教える箇所があり、俗称が教育によって本格的に名称に移っていったことが示されている。

2. 目的

本研究の目的は、身体のおおまかな各部位に与えられる名称や俗称、およびそれらが与えられる理由（心理的認知）を調査することである。この研究の前身は又吉（2002）にあり、それでは身体各部位への人物等の割り当てが可能であるとの示唆を与えているが、

予備研究的な段階であったため、改めて調査・研究を行い、身体各部位への人物割り当てと割り当てられる理由を明確にすることにした。具体的には、人間の身体への人物等の割り当てが存在するものと考え、図 1 に示す人体の各部位に指の幼児語に似たイメージが存在するのか否かを調査し、それを明らかにする。図 1 は、又吉（2002）を参考に、図柄に若干の変更を加えたものとなっている。調査研究の第 1 次研究は、指以外の両手足、頭、心（心臓）の部位に人物のイメージが固定されているのかを明らかにすること。仮に、固定化されたイメージが観測されれば、第 2 次研究として、パーソナリティ特性語（金城・又吉；1996）を用いた身体部位の好意度等から身体部位に割り当てられた人物のイメージを間接的に明らかにし、また身体部位への人物等の割り当ての意味、すなわち、なぜ、その人物が、その身体部位に割り当てられるのかを明らかにすることを目的としている。

3. 第 1 次研究

3.1 「指」以外の両手足、頭、心臓（心）の部位（以下、身体部位と呼ぶ）への人物イメージ

第 1 次研究の調査は、大学生以下の社会人でない人を対象（思春期）に選んだ。理由として、「指」では「お母さん指」が「人差し指」に変化しているように、社会的制約（結婚、子供、職場、社会的地位等）が影響すると思ったからである。調査期間は、平成 15 年 10 月～11 月。調査方法は質問紙法を用い、4 つの高校（普通高校 2、商業高校 1、農林

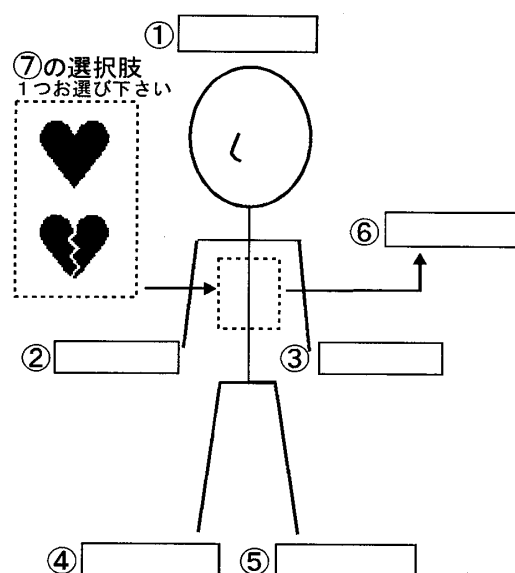


図1. 人物イメージ

高校1)と3つの私立大学で調査を行った。アンケート数：450（回収率100%），有効回答数：360（有効回答率：80%）であり，男性：89件，女性：163件，年齢：平均17.9（STD=2.22）歳，（若干のデータ欠落：未回答がある）となった。調査内容は，図1に示す空白に，イメージされる人物を表2の人物等群から選択。ただし，1つの空白に複数の人物等を回答した場合は，最初に書き記したものを優先した。また，調査に先立って，実在の人物等が存在しない場合でも，イメージで選ぶように口頭で注意を促して記入してもらった。ここで，図1の空白に埋める人物等を記した表2は，前半1～11番まで血縁者を配置し，12番以降は，身近な人を配置した。調査の対象が，大学生と高校生であるので，先生も追加してある。また，身近な存在として，人物ではないのだが，ペットを語群に加えてある。

3.2 結果

表3，表4および表5に集計結果の一部を示す。表3は，「頭」の位置に回答された人物等の割合である。

表2. 人物等群

1 自分	12 親友
2 父	13 男友達
3 母	14 女友達
4 兄	15 彼氏
5 姉	16 彼女
6 弟	17 先生
7 妹	18 ペット
8 祖父	19 元・彼
9 祖母	20 元・彼
10 おじ	
11 おば	

表3. 「頭」への回答(%), n:359

頭			
自分	61.3	親友	5.3
父	12.0	男友達	1.1
母	7.2	女友達	1.9
兄	0.6	彼氏	0.8
姉	1.1	彼女	0.8
弟	0.0	先生	2.5
妹	0.3	ペット	1.1
祖父	1.9	元・彼	0.0
祖母	1.7	元・彼女	0.3
おじ	0.0		
おば	0.0	無回答	0.3

「頭」に「自分」と答えたのは220人で，有効回答数に対する割合は61%と被験者の半数以上を占める。そこで本論文では，「頭」に「自分」を回答したものに限って分析し，その結果を報告する。それ以外は，サンプルが少ないので更なるデータを収集後に報告する予定である。

表4は，「頭」に「自分」を答え，かつ「左足」の位置に「自分」と答えたものを全体集計から差し引いた結果（人数：計194名，うち男性：79，女性：115，年齢：平均18.03（STD=2.13）歳，である。「左足」に「自分」と答えた者は23人であるが，この23人は，その殆どが①～⑥のほぼすべてに「自分」を回答しており，その内訳は，大学生：20人，高校生：3人となっている。大学生は，生活や収入において独立心が養われ“身体はすべ

表4. 左足—自分を除外, 頭—自分を回答
(%), n:194

	頭	右手	左手	右足	左足	心	ハート
自分	100.0	0.5	0.0	0.5	0.0	14.9	90.7
父	0.0	26.3	8.2	22.2	8.8	2.1	9.3
母	0.0	11.9	27.8	4.6	21.6	9.8	0.0
兄	0.0	5.2	3.6	9.3	5.2	1.5	0.0
姉	0.0	4.1	2.6	7.2	4.6	1.0	0.0
弟	0.0	3.6	3.6	17.5	5.2	2.1	0.0
妹	0.0	2.1	6.2	6.2	11.9	0.0	0.0
祖父	0.0	1.0	1.0	4.1	2.1	1.0	0.0
祖母	0.0	1.0	3.1	1.5	5.7	0.0	0.0
おじ	0.0	0.5	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0
おば	0.0	1.0	0.5	0.0	2.1	0.5	0.0
親友	0.0	14.4	11.3	4.6	5.2	19.6	0.0
男友達	0.0	10.8	8.8	7.7	7.2	3.1	0.0
女友達	0.0	8.8	13.9	4.6	8.8	7.2	0.0
彼氏	0.0	4.6	1.5	0.0	0.5	15.5	0.0
彼女	0.0	1.0	3.6	0.0	0.0	12.4	0.0
先生	0.0	0.5	1.0	2.1	4.1	0.5	0.0
ペット	0.0	2.6	2.6	3.6	6.2	4.6	0.0
元・彼	0.0	0.0	0.0	2.1	0.5	1.5	0.0
元・彼	0.0	0.0	0.5	1.0	0.5	2.6	0.0

表5. 左足—自分を除外, 頭—自分, 右手—
父を回答 (%), n:51

	頭	右手	左手	右足	左足	心	ハート
自分	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	21.6	94.1
父	0.0	100.0	2.0	5.9	2.0	0.0	5.9
母	0.0	0.0	88.2	3.9	3.9	7.8	0.0
兄	0.0	0.0	2.0	7.8	5.9	2.0	0.0
姉	0.0	0.0	2.0	9.8	5.9	0.0	0.0
弟	0.0	0.0	0.0	27.5	3.9	0.0	0.0
妹	0.0	0.0	2.0	7.8	21.6	0.0	0.0
祖父	0.0	0.0	0.0	11.8	0.0	0.0	0.0
祖母	0.0	0.0	0.0	2.0	11.8	0.0	0.0
おじ	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	0.0	0.0
おば	0.0	0.0	0.0	0.0	3.9	0.0	0.0

て自分である”という考えを持っていると考えられるだろう。派生的な課題として「頭」と「左足」に「自分」と答える人の独立心等の研究もいずれ行う必要がある。これについては, 3.3 左足 (自分と他者) にエゴグラムの質問項目との関連で, 特異な結果を示す自我状態と人格特性があることが示される。

表4を見ると, 「頭」に「自分」, 「左足」に「自分」以外と答えた人は, 質問紙の人物像の「右」に男性を, 「左」に女性を多く選択していることが分かる。しかも「父—母」「弟—妹」「祖父—祖母」「男友達—女友達」

表6. 性別による両手足・心の出現頻度

	右手	左手	右足	左足	心
男	102	53	126	57	54
女	62	115	50	107	69

「彼氏—彼女」のように対照的に答えていることが分かる。また, 両手に父母を答えた人は, 194人の中に「父」(右手: 51, 左手: 16), 「母」(右手: 23, 左手: 54) もおり, また, 両足にもそれぞれ「父」(右足: 43, 左足: 17), 「母」(右足: 9, 左足: 42) となっており, 父母は, 両手両足に強く結びつけられていることが判る。父母の違いで明確なのは, 手足の他に「心」である。「心」に「父」を答えたのは, 僅かに4 (2.1%) 人であるのに比べて, 「母」を答えた人は, 19 (9.8%) 人となっている。「母」は「父」よりも「心」にイメージされるようである。

「心」への出現率が高いのが「親友; 19.6%」「彼氏; 15.5%」「彼女; 12.4%」, そして「自分; 14.9%」である。「心」への「親友」「彼氏」「彼女」の出現率の総和は, 全体の47.5%とほぼ半数であり, 思春期の特徴としてとらえてよいと思われる。ここで, 「心」に「自分」と回答した被験者の殆どは大学生 (75.8%) であるため, 「心」へ「親友」「彼氏」「彼女」と回答していない大学生は, 付き合いのある特定の人がいなか,あるいは本人の自立を表しているのかもしれない。

一方, 大学生を除いたデータでの「心」への出現割合は, 「親友」が最も多く, 全体の26.4%もある。その他では「彼氏; 12.7%」「母; 12.7%」「女友達; 11.8%」となっているが, アンケートを取得した高校生の68.1%が女性であることから, 彼女らの「心」に占めているのは, 同性であり思春期特有の選択と見ることができるだろう。

表5は, 表4の中から右手に「父」を選ん

だ人の結果である。右手に「父」を選べば、その内の実に8割は左手に「母」を持っていく人が多く、また、両足に父母以外で、「右足」に「弟」、「左足」に「妹」を選ぶようである。一方、「兄」「姉」については、傾向として「右」に「兄」や「姉」を答えているようであるが、性の対照性は表4、表5のいずれにも見えない。ここで、参考までに男女の性別による両手足・心の出現頻度を表6に示す。

次に、血縁者以外で手足に多く答えられているのが、「男友達」、「女友達」である。ここにも男女と左右の対照性が見られるが、ここで、回答の少ない箇所注目すると、「足」に「彼氏」「彼女」の選択が少なく、「手」に「元・彼」「元・彼女」の選択が少ない、逆に「手」に「彼氏」「彼女」、「足」に「元・彼」「元・彼女」があることに気づく。この現象について大学生（女子）が、「手の届く範囲に恋人がいて、足の（元・彼）（元・彼女）は、引きずっているイメージ」「手は心の近くにあって、足は心から遠ざけたいイメージ」と答え、また、「足」に「男友達」「女友達」が選択されていることについては、「嫌いか、支えになっているイメージなのかもしれない」と語ったのが、同世代の心の内を垣間見た感があり、印象的であった。

3.3 左足（自分と他者）

本調査により、興味深い結果として「左足」に対して「自分」と答えている被験者のグループがあり、それが特異な群であることが明らかになった。「左足＝自分」と答えた集合をグループ（a）とし、「左足≠自分」と答えた集合をグループ（b）とする。グループ（a）は37名で、グループ（b）は、323名となった、被験者全体の1割程度が「左足＝自分」と答えている。本研究では、図1の空

欄に人物を当てはめる他に被験者に東大式エゴグラム第2版を用いて自己分析を行ってもらった。エゴグラムの各項目（CP：批判的親－父親役割、NP：養育的親－母親役割、A：成人－合理的、FC：自由な子供、AC：適応的な子供）の50の質問項目について（a）と（b）で母平均の差（選択得点平均）の検定（対応のない2標本・正規分布・ $\sigma 1, \sigma 2$ 未知）を行ったところ、次の2つの質問項目で5%有意を得ることができた。

FC 質問

「冗談を言うのがうまい」

: $a(1.24) > b(.94)$

AC 質問

「言いたいことを言えない」

: $a(.81) < b(1.10)$

また、統計的優位までは得られていないものの、ACの質問項目10項目中7項目で（a）グループよりも（b）グループの選択得点が高い。さらに総質問項目数50の内の選択得点の平均で（a）－（b）<0を示した項目の中で下位10項目中6項目はACの項目であった。また、（a）－（b）>0を示した項目の中で、上位10項目中CPに関する質問項目は5、FCに関する質問項目は4であった。

これらの結果は、3.2節の冒頭でも言及したが、「左足」に対して「自分」と答える若年者は、快活で批判力のある人物である可能性を示唆している。それらが即、独立心に繋がるとは限らないものの特異なグループであることは確かである。

3.4 まとめ ー第1次研究ー

ここまでの第1次研究では、社会人でない人（若年者）を対象に、人間の身体部位における人物割り当てについて、アンケートを取り、「頭」に「自分」を答えたものに限って分析した。その結果は、「左右」対照性のある身体部位に「男女」が対応する形で割り当てが行われていることが明らかとなった。特に「手」や「足」に特定の人物を配置する場合は、イメージした人物と身体部位の機能や好意度、地位、あるいは心的距離等の関連をうかがわせている。以後は、第2次研究の身体部位の機能イメージや好意度等を調査し、「右手ー父：26.3%」等がどのような意味で選ばれているのかを明らかにすることである。また、「頭」に「自分」以外を答えたデータの整理・分析や「右手」には、「父」「母」「親友」「自分」の順で回答頻度が高いが、「父」以外の人物ではデータ数が少なく、傾向をとらえることができなかった等を鑑みて、更なるデータの収集を行い研究の補完をしなければならない。

4. 第2次研究

パーソナリティを表現する特性語の収集と分類の試みは、古くから行われている。Allport&Odbert (1936) は、英語辞典を中心に特性語を収集し、18000語からなる特性語リストを作成している。Asch (1946) は、パーソナリティ特性語を用いた印象形成に関する一連の実験から、パーソナリティ特性語の中に「冷たいー暖かい」などの対人認知全般に強い影響を与える中心特性があることを指摘している。また、Anderson (1968) は、Asch (1946) と同様に印象形成実験に用いることを目的に555個のパーソナリティ特性語に対する大学生の好意度を測定し、順位付けを行っている。その結果によれば、アメリカ

の大学生に最も好まれる性格特性として「誠実な」「正直な」「理解のある」「忠実な」「信用できる」などの項目が挙げられ、逆に最も好まれない性格特性語としては、「うそつき」「いかさま師」「下品な」「残虐な」「正直でない」などの項目が挙げられている。また近年では、300項目からなる Adjective Check List (ACL; Gough&Heibrun, 1983) などの形容詞による評定用語集も作成されている(柏木・和田・青木, 1993)。本論文では、地域文化と時代背景による影響を考え、金城・又吉の「パーソナリティ特性の評定ーパーソナリティ認知の心理測定的研究ー, 名桜大学紀要第2号, 1996」から必要なパーソナリティ特性語を頂いた。金城等の抽出したパーソナリティ特性語は、文化的な価値観に基づく表現や、その時代に特有な表現が含まれることを考慮したものとなっていることに留意されたい。

4.1 パーソナリティ特性語を用いた身体部位の好意度と非好意度

第2次研究の調査は第1次研究の調査を踏まえて、大学生以下の社会人でない人を対象にアンケート調査を実施した。調査期間は、平成16年2月～4月。調査方法は、質問紙法を用い、商業高校1つと沖縄県内の2つの私立大学で調査を行った。アンケート数：232（回収率100%）、有効回答数：229（有効回答率：98.7%）であり、男性：108名、女性：116名、性別不明：5名、年齢：平均18.41（STD=1.66）歳、（それぞれに若干のデータ欠落：未回答がある）となった。調査内容は、図3の頭に当てはまる人物像を第1調査の表2より一つを選んで記入してもらった。この際、実在の人物が存在しない場合でも、イメージで選ぶように注意を促して記入してもらった（例えば、長男であるにもか

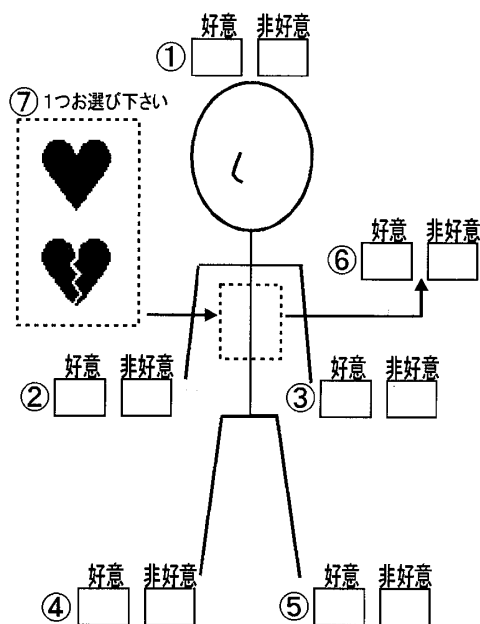


図2. 身体部位に対する好意・非好意

わらず「兄」をイメージできる)。その後、図1と同様の身体各部に表7のパーソナリティ特性語（形容詞）群から「好意」「非好意」の基準で選んだもらった。ただし、一カ所に複数回答した場合は、最初に書き記しものを優先した。表7のパーソナリティ特性語群は、金城・又吉の「パーソナリティ特性の評定—パーソナリティ認知の心理測定的研究—，名桜大学紀要第2号，1996」より，現代の若者を中心とした行為どの調査研究より，各パーソナリティ特性語（形容詞）に対する一般的な好意度の上位20と下位20を取り出し，それらをそれぞれランダムに並べたものである。

金城・又吉（1996）の研究は，パーソナリティ表現に用いられる特性語について対人的な好ましさの観点から検討を試みたものであり，若者の対人に対する好意・非好意の特性語を抽出するのに成功している。例えば，最も好意的に評価される特性語は，「心の広い」「信頼できる」であり，逆に最も非好意的に評価される特性語は，「うそつき」「だます」等が明らかになった。本論文においても，後述されるが，金城・又吉（1996）の研究

表7. パーソナリティ特性語群

好意的	非好意的
1、健康的な	1、下品な
2、幸せな	2、だます
3、思いやりのある	3、ずうずうしい
4、信用できる	4、信用できない
5、親切的な	5、しつこい
6、理解のある	6、意地悪な
7、暖かい	7、だらだらした
8、明るい	8、無気力な
9、頼りになる	9、いらいらする
10、責任感のある	10、わがままな
11、おもしろい	11、うそつき
12、しっかり者	12、根に持つ
13、気が合う	13、生意気な
14、決断力のある	14、当てにできない
15、心の広い	15、いい加減な
16、生き生きした	16、あつくるしい
17、やさしい	17、口が軽い
18、清潔な	18、自己中心的な
19、礼儀正しい	19、りっぱい
20、信頼できる	20、無責任な

表8. 「頭」への回答(%), n:201

頭			
自分	46.3	親友	6.1
父	4.4	男友達	9.2
母	4.8	女友達	7.4
兄	1.3	彼氏	3.5
姉	0.9	彼女	2.2
弟	1.7	先生	2.2
妹	1.3	ペット	3.1
祖父	1.7	元・彼	0.4
祖母	0.4	元・彼女	0.0
おじ	0.4		
おば	0.0	無回答	2.6

との一致を見る結果が得られている。

ところで，金城・又吉（1996）の研究では，好意度評定に関する因子分析の結果，「社交性」「自己中心性」「信望」「消極性」「軽率さ」「情緒的安定性」の6つの因子が見出されている。

このパーソナリティ特性語による身体部位の「好意」「非好意」より，第1次研究の研究を眺めることで，「指」にあるような，機能

表 9. 身体各部位に対する好意度 (上位 3)

頭-好意的	相対度数	累積相対度数
理解のある	21%	21%
思いやりのある	15%	36%
健康的な	9%	45%
右手-好意的		
頼りになる	15%	15%
健康的な	10%	25%
暖かい	10%	36%
左手-好意的		
清潔な	10%	10%
健康的な	9%	20%
頼りになる	9%	29%
右足-好意的		
健康的な	18%	18%
生き生きした	18%	36%
信頼できる	11%	47%
左足-好意的		
健康的な	17%	17%
頼りになる	14%	31%
生き生きした	13%	44%
心-好意的		
心の広い	14%	14%
健康的な	11%	26%
幸せな	10%	35%

的で質的な身体部位への俗称割り当てを明らかにすることができると考えられる。

4.1.1 「頭」に「自分」と回答の「好意」の選択頻度数

第1次研究の調査に習い、図2の「頭」に「自分」と回答したものだけについて考察することにする。表8に「頭」に回答した人物の出現割合を示す。

表8を見ると、表3とほぼ同様の結果となっているが、「男友達」「女友達」「彼氏」「彼女」の出現頻度が少し高い。これについてデータを見ると、大学生が高校生よりも多く回答し

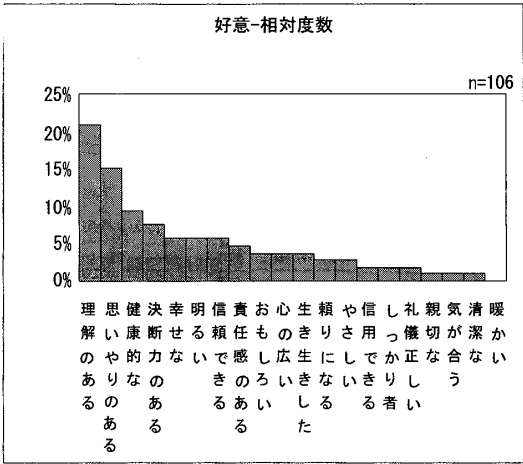


図 3. 「頭」へのパーソナリティ特性語「好意」

ている傾向があったが、その理由は判然としない。データをさらに集め、分析する必要があると考える。

次に、「頭」に「自分」と回答したグループの他の身体各部についての「好意」を上位3位までを抜き出すと次の表9のようになる。

表9より、身体各部位に共通に現れるものは、「健康的な」である。作業、動作などをその大きな目的とする両手足に「健康的な」が「好意的」にとらわれるのは理解できるものの、「頭」ならびに「心」に対して「健康的な」が上位に出現するのは、アンケートが身体の一部への回答であること、すなわち「心と体」が健康であってほしいことを暗示していると考えてよいだろう。「頭」や「心」の他の上位2つは、それぞれ「理解のある」「思いやりのある」、および「心の広い」「幸せな」となっており、これらの語彙はそれぞれの身体部位の特性に応じた回答になっていることが分かる。

4.1.2 「頭」について 一好意一

図3は、「頭」に対して回答した「好意」の出現頻度を相対度数(%)で示している。図3を見ると「頭」に対して好意的なパーソナリティ特性語は上位2に偏っていることがわかる。「理解のある」「思いやりのある」、そ

表10. 身体各部位に対する非好意度（上位3）

頭-非好意的	相対度数	累積相対度数
だます	13%	13%
意地悪な	10%	23%
怒りっぽい	10%	33%
右手-非好意的		
いい加減な	13%	13%
下品な	9%	22%
だらだらした	8%	29%
左手-非好意的		
当てにできない	15%	15%
だらだらした	13%	27%
無気力な	13%	40%
右足-非好意的		
だらだらした	20%	20%
下品な	10%	30%
怒りっぽい	9%	39%
左足-非好意的		
だらだらした	12%	12%
いい加減な	11%	22%
無責任な	10%	32%
心非好意的		
自己中心的な	11%	11%
意地悪な	9%	19%
信用できない	7%	26%

して「健康的な」「決断力のある」等を自分自身の「好意」的な面として認識していると考えてよいだろう。

4.1.3 「手」について 一好意一

次に、「手」について見てみると「右手」で「頼りになる」が多く（「左手」；3位）、「左手」では「清潔な」がわずかであるが多い（「右手」；7位）。また、「右手」には「暖かい」が上位にある（「左手」；9位）。「右手」は多くの日本人が利き手としていることもあり、「頼りになる」は理解に難くないが、「頼りになる」が上位にあるのは、第1次研究の

研究において「右手」のイメージは「父」「友人」が多く、その次に「母」「男友達」がくる。まさに「頼りになる」人物が「右手」に割り当てられていることの現われと考えてよいだろう。また、「右手」に「暖かい」が上位である理由は、「頼りになる」が暖かさを与えているのかもしれない。

一方、「左手」で「清潔な」選ばれる理由を第1次研究の研究と照らし合わせてみると、「母」「女友達」、そして「親友」となっている。「左手」に「清潔な」が多く選ばれる理由として機能面から考えた場合、自分の身体以外の物体を掴む等の行為に利用される「右手」に比べて、利用頻度が低いためであろうと思えるものの、人物像が「母」や「女友達」であるので、「女性」の「清潔さ」がイメージされているとも考えられる。

これらについては、更なる調査項目を増やして調査研究の必要がある、しかしながら、第1次研究の研究と第2次研究の研究の接点といえるだろう。

ここで、「右手」に関して上位10に現れ「左手」の上位10に現れない語彙として「生き生き；6位」「しっかり者；8位」「やさしい；9位」がある。これらは、「左手」においてそれぞれ15位、16位、18位に出現する。次に「左手」に関して上位10以内に現れた語彙として「面白い；4位」「思いやりのある；5位」があり、この2つは「右手」の上位10にはなく、それぞれ12位と11位に出現する。以上の語彙もそれぞれの「手」特有のイメージとして今後の調査により明らかにする必要がある。

4.1.4 「足」について 一好意一

次に「足」であるが、上位3の内「健康的な」と「生き生きした」が両足にあるのは、興味深い。「足」は「手」と異なり、動作にお

いて「自分自身」を物理的にある地点から別の地点に移動させる機能を有しており、「健康的」で「生き生きして」いるのが「好意的」なのは、理解しやすい。変化があるのは、「右足」の「信頼できる」と「左足」の「頼りになる」であるが、「右足」は、動作の一步となる「利き足」である場合が多く、「左足」が「軸足」であることが多いことを考え合わせると、興味深い。ここで、3. 結果（第1次研究）で指摘したように、「右足」に「彼氏」・「彼女」が出現し、「左足」に「元彼」・「元彼女」が出現する理由の一端が見えるのではないだろうか。金城・又吉（1996）では、恋人について好ましいとされる特性語の1位と2位は、それぞれ「信用できる」と「信頼できる」であるが、まさに本研究との接点がここにも現れている。

4.1.5 「心」について—好意—

身体のすべての部位に現れた「健康的な」を除くと、「心の広い」「幸せな」が「心」の主要な好意を表す語彙となる。第1研究段階で「心」の箇所に記入された人物像は、「親友」が第1であり、その後「彼氏」「自分」「彼女」と続く。「自分；14.9%」を除く「親友；19.5%」「彼氏；15.5%」「彼女；12.4%」で全体の47.5%であることから、「心」に占める同性・異性への好意は、「心の広い」と「幸せな」にあるようである。金城・又吉の「パーソナリティ特性の評定—パーソナリティ認知の心理測定的研究—、名桜大学紀要第2号、1996」では、同性・恋人への好意度の高い特性語として、「心の広い」が同性で3位、恋人で4位であり、「幸せな」については恋人で7位にある。これらもまた、本研究と既存の研究の興味深い接点のひとつである。

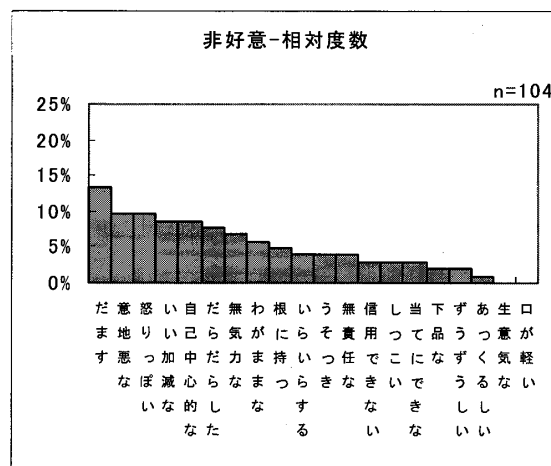


図4. 「頭」へのパーソナリティ特性語「非好意」

4.2.1 「頭」に「自分」と回答の「非好意」の選択頻度数

「頭」に「自分」と回答の各身体各部についての「非好意」を上位3位までを抜き出すと次の表10のようになる。表10を見ると、表9の身体各部位に対する好意度（上位3）と似た傾向として、動作をつかさどる身体各部位（両手足）に「だらだらした」が共通に現れる（好意では、「健康的な」が共通に現れる）。動作の主要機関の両手足は、「だらだらした」状態が嫌悪を抱かせるようである。一方、「頭」ならびに「心」に対して「意地悪な」が上位に出現するのは、「頭」と「心」の共通項目として興味深い。

4.2.2 「頭」について —非好意—

図4は、「頭」に対して回答した「非好意」の出現頻度を相対度数(%)で示している。図4において上位3までの「頭」に対する非好意的なパーソナリティ特性語は「だます」「意地悪な」「怒りっぽい」である。図3、および第1次研究の研究とあわせて考えると、「頭」に「自分」と回答したデータであるので、「理解のある」「思いやりのある」「健康的な」「決断力のある」自分自身を「好意」に

受け止め、「だます」「意地悪な」「怒りっぽい」自分自身を好意的に受け止めていないこと(=非好意)を示している。

4.2.3 「手」について 一非好意一

「手」の非好意の特性語の出現割合を見ると、両手に「だらだらした」があり興味深い。「手」は物を掴んだり、操作する際に利用される身体の部位であるので、「だらだらした」に対して嫌悪を抱いている事がわかる。「右手」の非好意を見てみると、「いいかげんな」「下品な」がそれぞれ1位と2位である。第1次研究の研究で「頭」に「自分」を回答する場合の「右手」には、「父」親がくる。父親に対する非好意(あるいは、嫌悪)感は、「いいかげん」と「下品」にあると考えられるのかもしれない。「右手」の好意を表す特性語は「頼りになる」であったが、対照的であることが明らかである。

一方、「だらだらした」を除いた「左手」の非好意の上位は「当てにできない」「無気力な」となっている。第1次研究の人物割り当てと好意的な「左手」のイメージの1位は女性に対する「清潔さ」であるが、非好意的イメージは、2と3位の「健康的な」「頼りになる」の対象となっているようである。「清潔な」の対語と考えられる「下品」は、右手=男性(第1研究段階)に現れているので、清潔さ=女性のイメージの対として、下品=男性となっている可能性がある。

4.2.4 「足」について 一非好意一

「足」の非好意の特性語の出現割合を見ると、両足に両手と同様に「だらだらした」があり、しかも1位であることは興味深い。「足」は身体を別の場所に移動させる機能を有した身体の部位であるので、「だらだらした」に対して嫌悪を抱いている事がわかる。「右

足」の非好意を見てみると、「下品な」「怒りっぽい」がそれぞれ2位と3位である。第1次研究の研究で「頭」に「自分」を回答する場合の「右足」には、「父」「弟」が来る。父親と弟に対する非好意(あるいは、嫌悪)感は、「下品な」と「怒りっぽい」にあると考えられるのかもしれない。「右足」の好意を表す特性語は上位から「健康的な」「いきいきした」「信頼できる」であったが、対照性は判然としない。むしろこれらの特性語は、「右手」の非好意にあった男性(父、弟)に対する非好意のイメージと考えるほうが妥当と考えられ、「下品な」が2位に来ていることは、そのことを指しているだろう。ここで、3位の「怒りっぽい」は、「右足」の動作の「蹴る」に繋がっているのではないかと著者は推察しているが、更なるデータ収集と分析が必要である。

次に、「だらだらした」を除いた「左足」の非好意の上位は、「いいかげんな」「無責任な」となっている。第1次研究の人物割り当てと好意的な「左足」のイメージのは「健康的な」「頼りになる」「いきいきした」であるので、対照的な選択となっていると考えてよいだろう。また、第1研究段階において「左足」は、「母」「妹」であり、非好意の上位の特性語が「母」「妹」への非好意を引き起こす特性語といえるのかもしれない。すなわち、「いいかげんな」「無責任な」言動などを「母」「妹」が日常生活の中で与えていると考えることもできるのではないだろうか。

ここで、第1次研究3.2節で、「足」に「元・彼」「元・彼女」があり、「手の届く範囲」に恋人がいて、足の(元・彼)(元・彼女)は、引きずっているイメージ」「手は心の近くにあって、足は心から遠ざけたいイメージ」と女子大学生が指摘・解釈した例を示したが、このイメージは、「右足」と「左足」の両方

に回答のある「だらだらした」を連想させる点は、注目に値する。さらに、「足」に「男友達」「女友達」が選択されていることについては、「嫌いか、支えになっているイメージなのかもしれない」と語った点については、好意度の点から見ると「右足」の「健康的な」「いきいきした」「信頼できる」と「左足」の「健康的な」「頼りになる」「いきいきした」との関連性を伺わせる。この同世代の率直な意見は、身体各部への人物等の割り当ての意味を的確に捉えていると考えてよいのではないだろうか。

4.2.5 「心」について 一非好意一

「心」への非好意は、「自己中心的な」「意地悪な」「信用できない」で代表され则认为てよいだろう。先述の第1研究段階で「心」の箇所に記入された人物像は、降順で「親友」「彼氏」「自分」「彼女」であるが、非好意の特性語をこれらの人物に感じたときに、非好意（あるいは、嫌悪）を抱くのかもしれない。金城・又吉（1996）では、同性・恋人への好意度の低い特性語として、「信用できない」が、同性で5位、恋人で4位にあり、ここでも本研究との接点が見出される。

ここで、「心」への非好意度の「信用できない」が同性、あるいは恋人に向けられているとすると、非好意の1位と2位の「自己中心的な」「意地悪な」は、先述の第1研究段階を考慮すると自分自身に向けられていると考えるとよいだろう。とすると、自己に対して「自己中心的な」「意地悪な」のパーソナリティ特性が非好意（嫌悪）として認識されていると考えられる。

5. まとめと今後研究課題

第1次研究によってえられた人物の身体部位への割り当てとパーソナリティ特性語の割

り当て（好意度、非好意度）を用いて、人物に対するイメージから身体各部への俗称の割り当てに対して、いくつかの定性的なイメージがあることが示唆された。従って、本研究の主目的である身体部位への人物等の割り当てとその意味についてある程度明らかにできたと考えている。

以下の点が、今後の研究課題として挙げられる。

- ①今回の第1次研究によって得られた人物の身体部位（頭、両手足、心臓）への人物等の割り当てで、興味深い例もあった（「頭=父」等の意味、「左足=自分」）ものの、サンプル数不十分で解釈できなかった。今後、データを蓄積する必要がある。
- ②今回の第1・2次研究で得られた知見をエゴグラムの視点から解釈する必要がある。これは、「左足」を「自分」と選択するような特異なケースを示す被験者の自我状態を知ることができる可能性がある。これについても現在のところ、サンプル数不十分で解釈できなかった。今後、データを蓄積する必要がある。
- ③今回の第1・2次研究で得られた知見から派生して、身体各部への人物等の割り当てから回答した人物の自我状態や身近な人への好意・非好意を推察する指標として、身体各部への人物割り当てが、他者への好意度の測定的利用に用いることが可能か否かの研究がある。

謝辞

本研究を実施するにあたって、沖縄国際大学商経学部商学科の狩俣理恵、町田夏紀には、共同研究者として研究の実施・データ入力・分析・解釈に関わって頂いた。特に解釈に関して、同年代の心理像を的確に表現したコメント等を頂いたことは、本論文への多大な貢

献であったと認識している。論文完成にあたり、ここに記して、深い敬意と感謝の意を表したい。

参考文献

1. 秋山俊夫 「第8章 パーソナリティ」
原岡一馬・河合伊六・黒田輝彦編 『心理学—人間行動の科学—』, 京都:ナカニシヤ出版, 1979, p.198.
2. Allport, G.W. Personality; A psychological interpretation. London: Cousable & Company, 1951.
3. Allport, G.W., & Odbert, H.S. "Trait-names. a Psycho-lexical Study." Psycho logical Monographs, 1936, 47.
4. Anderson, N.H. "Likableness Ratings of 555 Parsonality-Trait Words." Journal of Personality and Social Psychology, 1968, 9, p.272-279.
5. Asch, S.E. "Forming Impressions of Personality", Journal of Abnormal and Social Psychology, 1946, 41, p.258-290.
6. 青木孝悦 「性格表現用語の心理・辞典的研究—455語の選択,分類と望ましさの評定」 心理学研究, 1971, 42, p.1-13.
7. 青木孝悦 「性格表現用語における個人的望ましさの因子分析的研究」 心理学研究, 1971, 42, p.87-91.
8. 青木孝悦 『個性表現辞典—人柄を捕らえる技術と言葉—』 東京:ダイヤモンド社, 1974.
9. Gough, H.G., & Geibrum, A.B. The adjective check list manual (1983ed). Palo Alto, GA: Consulting Psychologist Press, 1983.
10. 柏木繁男・和田さゆり・青木孝悦 「性格特性の BIG FIVE と日本語 ACL 項目の斜交因子基本パターン」 心理学研究, 1993, 64, p.153-159.
11. 金城 亮・又吉光邦 「パーソナリティ特性の評定—パーソナリティ認知の心理測定的研究—」 名桜大学紀要第2号, 1996.
12. 又吉光邦 「身体部位への人物割り当てについて—相関分析および因子分析を中心に—」 沖縄国際大学商経学部紀要第31巻1号, 2002, p.59-67.